

アトピー性皮膚炎

Atopic Dermatitis (AD)

遺伝的、家族的な要素の強い即時型過敏症をいいます。主にアレルゲンを吸引することにより引き起こされる皮膚の痒みが著名です。最初猛烈な痒みが襲いますから、手や足を使って掻き、口を使ってかゆいところを舐めたり噛んだりという行為を一日中繰り返します。その結果、皮膚炎が益々ひどくなり、そこに細菌が感染して症状はさらに悪化します。ほとんどの犬は生後3歳までに発症します。また夏期にやや増悪する傾向があるようです。アトピーの犬の約半数には外耳炎も見られます。犬の場合アトピー性皮膚炎はノミアレルギー性皮膚炎に次いで頻繁に見られるアレルギー性皮膚炎です。

猫では犬ほど厳密にアトピー性皮膚炎の発症が特定されることはありませんが、可能性はあるとされています。

原因

アレルギーの原因となる抗原としてはあらゆるものが考えられます。ハウスダスト、ダニ、ノミ、食物、花粉などが特に重要と考えられています。ただしその原因を特定することはなかなか難しいものです。

以前はこれらのアレルギー物質を呼吸により吸引することが原因とされてきましたが、最近ではこれらの物質が皮膚から侵入し、それによる反応で起こるともいわれています。

症状

痒み、慢性的あるいは再発をくり返す皮膚炎、顔あるいは足、唇、耳、などに発症する皮膚炎、乾燥した皮膚、赤みをおびた皮膚(発赤)など。

3歳までに発症する皮膚炎で再発性で激しい痒みを伴う皮膚炎は疑ったほうがいいでしょう。

また、およそ半数の犬は外耳炎を併発しているとの報告も有りますし、二次的にブドウ球菌やマラセチアという酵母の感染症が起り症状が悪化します。



診断法

アレルゲンの確定が第一ですが、大変困難です。もちろん、皮内試験や血液検査がその診断の助けをしてくれる場合もあります。また、アレルゲンの特定は難しい場合も多いですが、皮膚組織検査がアトピー診断の助けをしてくれます。

現在、犬においては「アトピー性皮膚炎診断基準」というものがあり、これにより診断されるのが一般的です。

治療法

アレルゲンが確定すればこれを遠ざけることが最善です。但しなかなか難しいものです。

その他、いろいろな対症療法が用いられています。ほとんどは投薬により、痒み止め、抗アレルギー剤、消炎剤、免疫抑制剤、二次感染に対して抗生物質の投与などが行われます。また、特殊な薬用シャンプーを用いて治療を補助してあげることも勧められます。

また、最近ではインターフェロンや免疫抑制剤、減感作療法などが開発され用いられるようになりました。

その他として皮膚病用で痒みや炎症を抑えてくれる処方食、サプリメントによる食餌療法も行われることがあります。

自宅での看護法

基本的にこの病気の場合には治すというよりは病気とつき合っていくという意識が必要です。症状のひどい時には投薬を怠らないのはもちろんですが、薬用シャンプーによる定期的な皮膚被毛の洗浄は痒みを和らげてくれますので、主治医の先生と相談しながら行いましょう。

また、処方食、サプリメントなどを使うことにより、痒みや炎症をある程度抑えることもできます。

予防法

遺伝的要因が示唆されていますので、一般の方にはなかなか難しいですが、血統書を確認するか、親や兄弟姉妹を確認してから購入する。信頼できるブリーダー、ペットショップを選ぶなどしかないでしょう。

食餌に関しては日頃から安価粗悪なものは避け、きちんとしたメーカーのフードを用いることが重要です。

室内飼育であればこまめな清掃、換気、空気清浄機の使用は多少なりとも効果があるかもしれません。また動物病院で処方されるようなきちんとした薬剤を使ったノミダニ対策も忘れずに。

メモ

日本で主にアトピーの好発犬種とされているものには、柴犬、シーズー、ゴールデン・レトリバー、ジャーマン・シェパード、ヨークシャー・テリア、ビーグル、ラブラドル・レトリバー、シェットランド・シープドック、マルチーズ、ミニチュア・シュナウザー、ダルメシアンなどがあります。特に柴犬・シーズーはアトピーになる子が多いとされていますので、きちんと調べてから購入しましょう。